

県立図書館だより

平成23年2月

青森県立図書館報 第9号

RABアナウンサーさんたちによる冬休みおはなし会

青森県立図書館では、児童閲覧室内のおはなしコーナーにおいて、夏休み・冬休みの平日の2日間、青森放送(RAB)のアナウンサーさんたちによるおはなし会を開催しています。

「アナウンサーさんたちによるおはなし会」は、平成19年度から開始、今年度で4年目となります。夏と冬の会に、毎回違うアナウンサーさんがおいでになり、テーマに沿った大型絵本の読み聞かせを行っています。

平成23年の冬休みおはなし会は1月12・13日に開催し、12日は星和明さん、13日は田村啓美さんが読み聞かせをしてくださいました。



1月12日の様子



1月13日の様子①



1月13日の様子②

また、毎月第2土曜日の午後2時から2時30分まで、児童閲覧室内のおはなしコーナーにおいて、読み聞かせボランティアと図書館職員による絵本の読み聞かせやブックトークを行う「おはなし会」も開催しています。読み聞かせのリクエスト「この本よんで！」もお待ちしています。

「おはなし会」は大人の方も参加いただけます。子どもたちと一緒に本の世界へ飛び込んでみませんか。子どもの頃とは違うストーリーに出会えるかもしれません。

児童閲覧室では、「科学おはなし会」等の楽しいイベントも開催しています。詳しくは、当館ホームページ「こどものへや」をご覧ください。

※ こどものへや (<http://www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/kodomo/index.html>)

目 次

RABアナウンサーさんたちによる冬休みおはなし会	1
近代文学館ギャラリートーク	2
こんなレファレンスがありました	3～4
子どもの本の紹介	5
郷土資料の紹介	6
近代文学館資料の紹介	7
カウンターから一言	8

近代文学館ギャラリートーク

青森県近代文学館では例年、秋から春にかけて月2回ほどのペースで解説員によるギャラリートークを実施しています。

常設展示室を会場に、青森県を代表する13人の作家について、作品の朗読を交えながらわかり易く解説します。



ゆかりの品や直筆資料を目にしながらか、作家と作品について理解を深められると好評で、繰り返し足を運んでくださる方も少なくありません。参加者の方にはトーク終了後、任意でアンケートへの協力をお願いしているのですが、「作家の入口を紹介され大いに助かる」というお言葉をいただいたこともありました。

事前申し込みは不要です。当日、時間までに青森県近代文学館常設展示室にお越しください。ご参加をお待ちしています。

※平成22年度の日程とテーマ

開催日	時間帯	テーマ(取り上げる作家と作品)	担当解説員
10月30日(土)	13:30-14:00	石坂洋次郎『何処へ』	大川ちひろ
11月6日(土)	13:30-14:00	三浦哲郎『拳銃と十五の短篇』	齋藤千佳
11月13日(土)	13:30-14:00	葛西善蔵『椎の若葉』	大川ちひろ
11月20日(土)	13:30-14:00	北畠八穂『鬼を飼うゴロ』	齋藤千佳
12月4日(土)	13:30-14:00	佐藤紅緑『少年行進曲』	大川ちひろ
12月11日(土)	13:30-14:00	寺山修司『われに五月を』	齋藤千佳
12月18日(土)	13:30-14:00	長部日出雄『津軽から飛んだ』	大川ちひろ
1月22日(土)	13:30-14:00	今官一『牛飼いの座』	大川ちひろ
1月29日(土)	13:30-14:00	秋田雨雀『幻影と夜曲』	齋藤千佳
2月19日(土)	13:30-14:00	太宰治『正義と微笑』	大川ちひろ
2月26日(土)	13:30-14:00	高木恭造『まるめろ』	齋藤千佳
3月5日(土)	13:30-14:00	北村小松『船底の秘密』	大川ちひろ
3月12日(土)	13:30-14:00	福士幸次郎『展望』	齋藤千佳

こんな レファレンスがありました



(第9回)

参考・郷土室では、「探している本が、どこの図書館にあるのか知りたい。」
「こんなテーマの本はありますか。」「こういう事柄や人物を調べたいが、どんな本がありますか。」などというレファレンス（質問）に、図書館資料等を使って、お答えしています。

そのレファレンスの中から、郷土や最近の話題を取り上げて紹介します。

烏兔忽々、年が明け、平成となって今年は23年目「卯年」、平成元年は巳年でしたから、来年の辰年で十二支も二巡することになります。

「うさぎ」といえば月。兔が月に棲んでいる或いは月の精であるという伝説は、中国の伝説に古くからあり、日本でもお餅をつく姿を思い浮かべる方は多いのではないのでしょうか。日本では「餅をつく」ですが、中国では「菓を搗（つ）く」です。晋の溥玄（ふげん）の文中や、李白の詩「酒を把りて月に問う」の一節にも「白兔菓を搗く」とあります。



書き出しで「烏兔（うと）」という月日を表す言葉を使いましたが、中国で「烏（からす）」は、「日の中には三足の烏あり」と『韻会（いんかい）』という字引に書かれているなど、古くから太陽に棲んでいると言い伝えられています。

そこで、兔とあわせて月日という意味を表す言葉になっています。

今回は、レファレンスでお問合せをいただいた、干支に因んだ話題を紹介します。

【質 問】今年の干支は何ですか？

「来年の干支はなんだっけ？」「え～っと、子丑寅…卯、うさぎだね。」そんな会話が、秋深まる頃に皆さんの間でも交わされたのではないのでしょうか。

「今年（来年）の干支はなんですか？」という御質問を毎年のようにいただきます。さて今年、平成23年の干支は本当に「卯（兔：うさぎ）」で良いのでしょうか。「干支（えと）」という言葉は『広辞苑』で引いてみると「① 十干十二支（じっかんじゅうにし）」とあります。十干十二支は中国に発生した暦の考え方で、朝鮮を通じて日本に移入されたとされています。

十干とは「甲（こう）、乙（おつ）、丙（へい）、丁（てい）、戊（ぼ）、己（き）、庚（こう）、辛（しん）、壬（じん）、癸（き）」で、もともと日の順番を表すものとして使われていました。戦前、生徒の成績を表す記号として使われたことから分かるように、単に順番を示すためのもので、それに陰陽五行説の宇宙で発生する活力ある物質「木火土金水（もくかどごんすい）」が結び付けられ、複雑な読みと意味を持つようになりました。そして、吉凶や縁起、或いは迷信や俗説を生じさせる要因になっていったものと考えられています。

この十干と十二支を組み合わせて暦日を数えるのが「十干十二支」です。

その組み合わせは60通りで、61年目には一巡して生まれた年と同じになるので、「暦」が「還（かえ）」るで、数え年61歳を迎えられる方のお祝いを「還暦」と言います。

勿論「干支」という言葉の意味には、『広辞苑』で見ると②十二支。年、特に生年や方位・時刻に当てる。とありますので、「今年の干支は“うさぎ”」で間違いではありません。でも、図書館にいただいたのは「十二支」ではなく「十干十二支」の質問でしたので、「辛卯（かのとう）」とお答えしました。

さて、津軽では「一代様」という十二支に関係する信仰があります。

「一代様」とは、十二支と仏教の八大菩薩を組み合わせ、生まれた年による自分の守り本尊を信仰するというものです。また、一代というのは、「一生涯」「生きている間」の、という意味です。

この干支（十二支を指す。）を守り本尊とする信仰は古くからあり、武士が戦に向かう際には一代様のお守りを身につけ出陣し、家族は武運を祈願していました。平時には、諸願成就・病氣平癒・開運などを祈ったと云われています。江戸時代には全国的に信仰されていたようで、各種の「節用集（室町時代に成立し、江戸時代に盛んに使われていた国語辞典）」に必ずと言っていいほど一代様守本尊が掲載されていたそうです。津軽地域のように、現在まで一代様信仰を根強く伝えているのは、全国的にも珍しいことだそうです。

「一代様」は、大変多くの問合せをいただく事項です。一覧で紹介します。

	干支	守本尊	津軽の一代様	場所・連絡先
1	子	千手観音菩薩	目屋の清水観音	弘前市桜庭清水流104 「多賀神社」 TEL 0172-86-2952
2	丑・寅	虚空蔵菩薩	百沢の虚空蔵様	弘前市百沢寺沢29 「求聞寺(ぐもんじ)」 TEL 0172-83-2373
3	卯	文殊菩薩	茂森(兼平)の天満宮	弘前市西茂森1-1-25 「天満宮」 TEL 0172-32-5796
4	辰・巳	普賢菩薩	愛宕様(将軍地蔵)	弘前市愛宕山下63 「橋雲寺」 TEL 0172-82-3429
5	午	勢至菩薩	袋の観音堂 「白山姫(しらやまひめ)神社」	黒石市袋字富岡 連絡先: 黒石市浅瀬石清川138 「羽黒神社」 TEL 0172-52-5516
6	未・申	大日如来	大鰐の大日様	大鰐町蔵館村岡12 「大円寺」 TEL 0172-48-2017
7	酉	不動明王	古懸の御不動様	平川市碓ヶ関古懸門前1-1 「国上寺」 TEL 0172-45-2446
8	戌・亥	八幡大菩薩	弘前の八幡様	弘前市八幡町1-1-1 「弘前八幡宮」 TEL 0172-32-8719

※ 上記は、一代様を祀っている社寺の一部、藩政時代から各一代守本尊を祀っている社寺を例として紹介しました。他にも、十二支全部を祀っている社寺などがありますが、全て紹介できませんので御了承ください。

皆さんも一度、御自身の一代守本尊を訪ねてみてはいかがでしょうか。

【参考資料：上記記述済の他】

『十二支物語』諸橋徹次著 大修館書店 1988年

『日本大百科全書 第10巻』小学館編 1994年

『暦の百科事典 2000年版』暦の会編 本の友社 1999年

「津軽の一代さま」工藤哲彦著 (『東奥文化 第57号』) 1986年 他

●レファレンスは、電話・手紙・FAXのほか、電子メールでも受け付けています。

レファレンス申込み及び問い合わせ先

青森県立図書館 参考・郷土室

電話 017-729-4311 FAX 017-762-1757

電子メール sanko@plib.pref.aomori.lg.jp

子どもの本の紹介(第9回)

皆さんは、自分が読んだ絵本の世界を覚えていますか。
毎年、たくさんの児童文学や絵本が映画化されています。
自分が描いた本の世界そのものの映画もあれば、イメージ
と全く違った映画もあるのではないのでしょうか。



イラスト わたなべふみ

そこで今回は、2010年に公開された映画の原作を紹介します。

『かいじゅうたちのいるところ』モーリス・センダック／著 じんぐうてるお／やく 富山房 1975 (E センダック A05A)

おおかみの着ぐるみを着たマックスは、いつもいたずらばかり。ついに、お母さんに寝室に閉じこめられてしまいます。閉じ込められた寝室は、いつの間にか、森になり、野原になり、ついに海へ。ボートに乗って、たどり着いた場所は「かいじゅうたちのいるところ」。マックスは、かいじゅうの王さまとなり、かいじゅうたちと一緒にかいじゅう踊りを踊ります。でも、かいじゅうたちといても、マックスは、だんだん寂しくなってきました。ある日、乗ってきたボートに乗り、家を目指して出発します。たどり着いた先は…。

この絵本は、センダックの代表作といわれています。

『ねずみくんのチョッキ』なかえよしを／作 上野紀子／絵 ポプラ社 1974 (E ウェノ A04A)

ねずみくんの赤いチョッキは、お母さんが編んでくれたもの。「いいチョッキだね。ちょっと着させてよ。すこしきついがにあうかな？」と、トリやサル、ライオンたちが、次から次へとねずみくんのチョッキを着てみます。だんだん伸びていくねずみくんのチョッキ。最後にねずみくんのチョッキを着たのはゾウ。ねずみくんのチョッキはどうなったのでしょうか。

『チェブラーシカ』エドゥアルド・ウスペンスキー／原作 こじまひろこ／訳 やまちかずひろ／文 小学館 2007 (E チェブラ A05A)

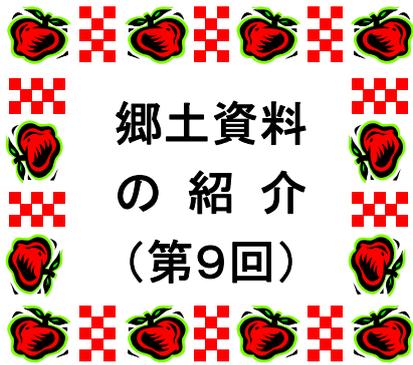
『くまのがっこう』あだちなみ／絵 あいはらひろゆき／文 ブロンズ新社 2002 (小E アダチナ A06A)

『おまえうまそうだな』宮西達也／作絵 ポプラ社 2003 (E ミヤニシタ A05B)

『ぴょーん』まつおかたつひで／作・絵 ポプラ社 2000 (小E マツオカタ A06A)

紹介した絵本の他にも、映画化されたものがあります。

絵本は、子どもはもちろんのこと、大人も楽しめるものです。みなさんも映画をとおして、また、実際に絵本を手に取り、その世界を体験してみませんか。



郷土資料 の紹介 (第9回)

青森県立図書館では、青森県に関する資料や、青森県内で刊行された資料、青森県在住者・出身者の著作物などを、郷土資料として積極的に収集し、永く保存するとともに、県内外の皆様にご利用いただいております。

このコーナーでは、当館所蔵の郷土資料の中から、普段はあまり人目に触れる機会の少ない貴重な資料などをご紹介します。

詩人・俳人・童謡作家として、生涯にわたり、生地弘前市で文学活動が続けた蘭繁之さん（1920～2008 弘前市出身）。

詳しくは次のページで紹介していますが、蘭さんの仕事を代表する「緑の笛豆本」は、彼の“体力の限界”を理由に、惜しくも2004年に終刊となり、公式には、第422集『箱館奉行・栗本鋤雲 下巻』（桜井健治著）が最後の作品とされていました。



ところが、蘭さんの死後、幻の終刊とも言える第423集『幻の日本陶貨物語』（川出博章著）の存在が明らかになりました。

『幻の日本陶貨物語』は、著者分200部のみが制作されたものの、会員分が制作できなかったために、非公式の存在とされたようです。

生前「美術館に入るような本を作りたい」「豆本は最後までやるよ」と語っていたという蘭さん。丁寧に仕上げられたこの作品からは、文学活動（詩作）と美術活動（木版画と装丁）に生涯をかけた彼の情熱が伝わってくるようです。

第423集『幻の日本陶貨物語』を含む「緑の笛豆本」は、貴重資料として大切に保管しております。お手にとって御覧になりたい場合は、当館職員にお問い合わせください。

また、県近代文学館では、企画展「新収蔵資料展 蘭繁之の世界」を3月13日まで開催しています。期間中は「緑の笛豆本」をはじめとする蘭さんの貴重な作品を多数展示しておりますので、どうぞお立ち寄りください。

参考資料：

「故蘭さん緑の豆本に幻の終刊 体力限界も制作に情熱」『陸奥新報』2008/10/17
「夫婦つれづれ 「夫唱婦唱」でお互いの個性伸ばす」『陸奥新報』1996/8/31

近代文学館資料の紹介(第9回)

蘭繁之「緑の笛豆本」と限定特装本

青森県近代文学館では、1月15日から3月13日まで「新収蔵資料展 蘭繁之の世界」を開催しています。今回は、展示資料の中から、蘭繁之の代表的な仕事である「緑の笛豆本」と限定特装本についてご紹介します。



「緑の笛豆本」と専用津軽塗箱(田中屋製)

蘭繁之は、1920(大正9)年、弘前市和徳町に生まれ、詩人として活動する一方、1965(昭和30)年に「緑の笛豆本の会」を立ちあげ、手作りによる豆本や限定特装本を刊行しました。

前ページでも紹介していますが、「緑の笛豆本」は、昭和40年8月1日の第1集『竹久夢二の想ひ出』から始まり、39年間にわたって第423集まで刊行を続け、全国的にその名を知られました。はがきの半分の大きさ(約8cm×10cm)、背を縞模様の

木綿で飾り、表紙に蘭の版画を多く用いた民芸調の豆本は、限定250部、原則として月1回の刊行で会員のもとに届けられました。内容は、青森県にゆかりの作家や文化を中心とし、竹久夢二・棟方志功・石川啄木、詩歌集など、文学に関するテーマが多いのが特徴です。

昭和28年、小樽で刊行された「ゑぞまめほん」を皮切りに豆本ブームが起こり、全国で多くの豆本が刊行されましたが、これだけ長く続いた豆本は非常に珍しいものです。

「本は、たゞ知識を吸収するだけでなく、目で見、手で触れ、なおかつ鑑賞に耐えるものであってほしい」「美しい本は、周囲の家族や友人と連帯の喜びが持て、そして何よりも座右においても飽きることはありません」(「弘前文学」第65集)と考えていた蘭は、豆本製作の一方で、限定特装本の製作も精力的に行いました。

棟方志功『哀しき父と悲しき母の物語』は、「緑の笛豆本」第18集(昭和44年6月)として刊行された随筆集ですが、豆本以外に、数種類の限定特装本が緑の笛豆本の会から刊行されています。

豆本と同時に発表された特装版は、総赤革装、志功の絵の金箔押しという豪華なもの。この作品を気に入った志功の希望により、翌年、2篇の随筆を追加して『哀しき父と悲しき母の物語・完』が限定350部で新装刊行されました。今回は、志功の特装本の中から5種を展示しています。表紙には、白革装、赤革装に錦石はめ込み、黒革装に金箔押し、銅板はめ込み、と様々な手法が施されており、「美しい本」「鑑賞に耐える本」を目指して手作り限定本の製作に打ち込んできた蘭の志が示されています。



棟方志功『哀しき父と悲しき母の物語』特装各種
昭和44年9月1日・45年11月3日 緑の笛豆本の会刊
左3冊は北海道文学館蔵、残りは館蔵

カウンターから一言 (第9回)



今回は、「インターネット利用席」についてご案内します。

一般閲覧室には、「インターネット利用席」を3席設置しています。

事前申込みの必要はなく、席が空いていれば、どなたでも無料で御利用いただけます。すべての席が利用中の場合は、すぐ隣に「インターネット利用待機席」を用意していますので、そちらでお待ちいただくことになります。



インターネットは、「Google」、「YAHOO!」、「goo」、「msn」の4つの検索エンジンから御利用いただくことができます。

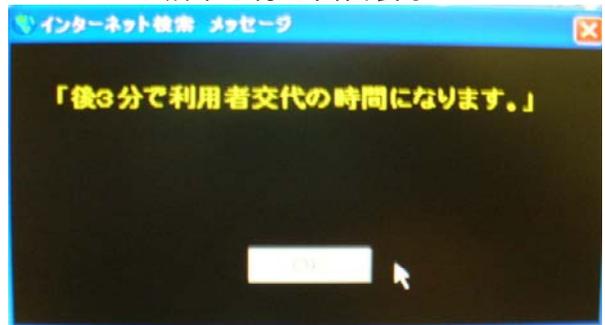
書店や出版社などのホームページから図書を検索したり、ニュース、その他の情報を確認することができます。

1回の利用時間は30分間となっており、画面に残り時間が表示されます。御利用の途中で残り時間がなくなった時に待機席でお待ちの方がいる場合は、いったん席をお譲りください。再度利用したい場合は、改めて待機席でお待ちいただくことになります。なお、待機席でお待ちの方がいない場合には、そのまま引き続き30分間利用することができます。

はじめの画面



残り3分の画面表示



なお、県立図書館のインターネット利用席では、次のことは利用できませんので御了承ください。

メール、チャット、ゲーム、掲示板への書き込み、ダウンロード、Word・一太郎などのワープロソフト、Excelなどの表計算ソフト、文書・画面の保存、画面のプリンタ出力、周辺機器の接続

編集後記

ホームページを活用しての「県立図書館だより」第9号は、「RABアナウンサーさんたちによるおはなし会」についてご紹介しました。アナウンサーさんによる絵本の読み聞かせは、また、一入です。「おはなし会」や「科学おはなし会」と同様、親子一緒に、絵本の世界を楽しんでください。

(広報委員会)